

都道府県・ 指定都市番号	18	都道府県・ 指定都市名	福井県	研究課題番号・校種名	2 (5) 小学校・中学校
				領域名	校種間連携
研究課題	学校全体で取り組む研究課題 (5) 校種間の連携による教育課程の編成、指導方法等の工夫改善に関する実践研究				
指定年度	平成 28 年度～平成 29 年度				
ふりがな 学校名 (園児・児童数)	つるがしりつ つるがきたしょうがっこう (195 人) つるがしりつ かんしんしょうがっこう (90 人) つるがしりつ あかきしょうがっこう (11 人) つるがしりつ つの がちゅうがっこう (172 人)			学校・地域の特色及び実態等 ・落ち着いて学習に取り組むことができ、素直で真面目な生徒が多い。 ・小学校で培った力が、中学校になると発揮できないことがある。	
所在地 (電話番号)	敦賀市立角鹿中学校：福井県敦賀市角鹿町 6 - 1 (0770-22-1634)				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	http://edu.ton21.ne.jp/tsunoga/				
研究のキーワード	<input type="checkbox"/> めざす生徒像 <input type="checkbox"/> 主体的に学習する態度 <input type="checkbox"/> 見取り(評価) <input type="checkbox"/> 円滑な小中学校の接続 <input type="checkbox"/> 小中学校の教師間の相互理解				
研究結果のポイント	<input type="checkbox"/> 『めざす生徒像』を共有した校種間連携による教育活動 9ヶ年を見通した『めざす生徒像』を4校の協議により策定し、小中一貫の組織づくりを行った結果、教師間に他校及び異校種への相互理解が進み、協働した取組が進んだ。 <input type="checkbox"/> 『主体的に学習する態度』に対する評価規準の作成とその見取り(評価) 授業における児童生徒の『主体的に学習する態度(めざす態度)』を明確にした見取り(評価)を踏まえた教科指導により、児童生徒、教師ともに「学び」に対する変容が芽生えた。 <input type="checkbox"/> 円滑な小中学校の接続に向けての基盤づくり 計画的な小中・小中連携授業等の交流活動により、児童の中学校に向けての進学意欲が向上し、学習への不安感に対する減少や、生徒の自己肯定感や有用性の向上が見られた。				

1 研究主題等

(1) 研究主題

児童生徒が主体的に学ぶ姿を通して、小中学校を円滑につなぐ教科指導及び支援体制の工夫・改善～小中接続を意識した主体的な学びにつながる『めざす生徒像』の追究～

(2) 研究主題設定の理由

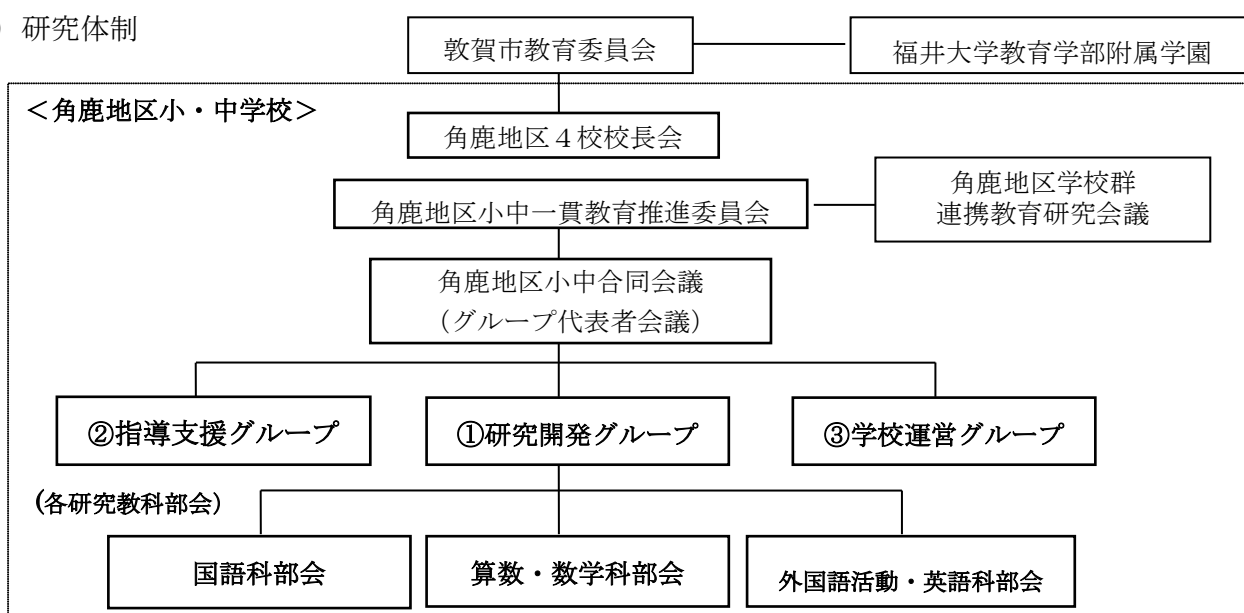
本地区は数年後、福井県の公立校では初の小中一貫校になる予定である。これまで独立していた各小中学校が一貫教育を行うためには、共通の『めざす生徒像』が必要であり、教育活動における学校間の意識に差異があってはならない。

本地区では、小学校における小さなコミュニティで培った力が、中学校になると発揮できない状況にある。また、幼い頃からの人間関係の固定化が、互いを頼り合うことになり、新しいことへの挑戦を消極的にする態度につながるなど「主体性」を妨げる一要因となることが考えられる。

そこで、本地区4校では、児童生徒の力強さや向上心といった態度に着目し、『主体的に学習する態度』の育成を目指した教科指導を軸とした実践を通して、小中連携の横糸と小中連携の縦糸とを組み合わせながら、小中一貫校として円滑に一体化するための研究を進めていきたい。

この研究を進めることにより、本地区の教育水準の向上や敦賀市における今後の小中一貫教育の推進に資すると考え、上記の研究主題を設定した。

(3) 研究体制



※各グループの役割

- ①研究開発…国語科，算数・数学科，外国語活動・英語科の各教科において，発達の段階，教科の特性を吟味した『主体的に学習する態度(めざす態度)』を作成し，その態度に近づく授業づくり，見取り(評価)の工夫を図る。
- ②指導支援…『めざす生徒像』に迫る指導支援体制の具現化に向け，円滑な小中学校の接続を目指した実践に取り組む。
- ③学校運営…『めざす生徒像』の追究を通して，敦賀市の小中一貫教育の取組を推進する。

(4) 1年間の主な取組

平成28年度	<p>各グループにおける諸活動 (※①：研究開発 ②：指導支援 ③：学校運営)</p> <p><4月～8月> 『めざす生徒像』の策定</p> <ul style="list-style-type: none"> ○『めざす生徒像』に迫るための「児童生徒の姿」(低学年・高学年・中学校)の策定 ○教科における『主体的に学習する態度(めざす態度)』の検討(各研究教科部会)…① ○小中学校の円滑な接続に向けての「指導支援体制」「交流活動」の計画，検討…② ③ <p><9月～12月> 『めざす生徒像』に迫る取組の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ○「小中合同授業研究会」の実施…① ○「指導支援体制」(小中合同教育相談担当者会議)の実施…② ○「交流活動」(小小連携授業・小中連携授業・小中交流行事)の実施…③ <p><1月～3月> 『めざす生徒像』に迫る取組の振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> ○小中学校の「研究体制」の見直し…① ○「指導支援体制」(生活のきまり，SNS等の指導計画等)の確認と強化…② ○「交流活動」の精選と改善…③
--------	--

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

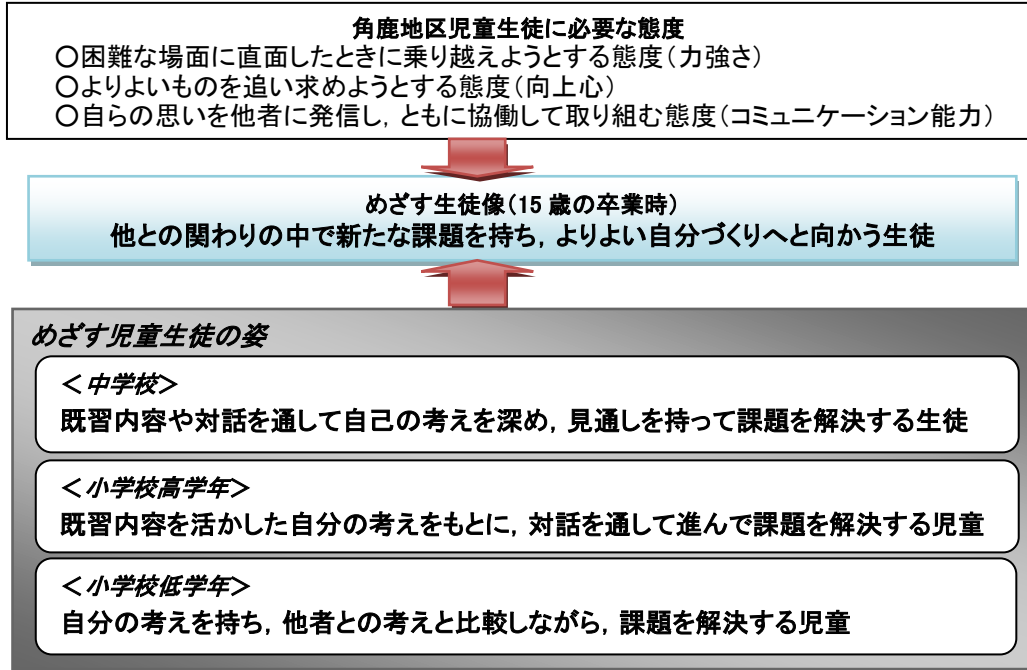
- ①小中学校の9ヶ年を貫く『めざす生徒像』の設定と組織づくり
 - ・全国学力・学習状況調査からの「本地区4校の実態」の分析に基づく児童生徒の教育課題や保護者の願いを踏まえて，目標となる「中学校卒業時の生徒像(めざす生徒像)」を策定する。
 - ・その像に迫るための組織づくりを行うとともに，家庭・地域に対しての共有化を図る。
- ②『主体的に学習する態度』の評価規準の作成
 - ・『主体的に学習する態度』を軸とした教科指導において，研究教科(国語科，算数・数学科，外国語活動・英語科)での発達の段階に応じた『めざす態度』(評価規準)を作成する。
 - ・その『態度』に近づけるための見取りの手立て(評価方法)について研究する。
- ③円滑な小中学校の接続に向けての指導支援体制の確立
 - ・小小・小中連携授業，小中合同行事等の児童生徒の交流や，小中合同会議(毎月開催)による教師間の定期的な意見交流により，相互の学校，教師間の理解を推進することで，一貫校に向けた基盤づくりを図る。

(2) 具体的な研究活動

①小中学校の9ヶ年を貫く『めざす生徒像』の設定と組織づくり

全国学力・学習状況調査における本地区の実態として、「難しいことでも、失敗を恐れずに挑戦する」「解き方がわからないときでも、諦めずにいろいろな方法で考える」において中学校の肯定的回答の減少や、「地域や社会をよくするために何をすべきか考える」の回答の低さなどから4校で協議して『めざす生徒像』を設定した。そして、その像に向かう発達の段階に応じた姿「めざす児童生徒の姿」を作成し、それに近づくための教科指導、支援体制を推進した。

【めざす生徒像、めざす児童生徒の姿（主体的な学び）】



②『主体的に学習する態度』の評価規準の作成（研究開発グループ）

小中合同研究教科部会において、発達の段階に応じた『主体的に学習する態度(めざす態度)』を評価規準として設定し、その『態度』を引き出すための手立てと見取り(評価)の方法について研究に取り組んだ。

10, 11 月には、各研究教科部会で単元を絞り込み、各小中学校で授業に臨んだ。例に示すような『主体的に学習する態度(めざす態度)』が表れる授業の組立や児童生徒へのアプローチ、見取り方についての共有化を図り、授業改善に生かした。授業では、児童生徒を引きつける問題の提示から「既習内容カード」を用いての話し合い活動や、グループ毎に発表ボードを用いての問題解決における話し合いの「過程の可視化」などに取り組んできた。

例: 中学校 主体的な学びにつながる「めざす態度」(評価規準)

	国語科	算数・数学科	外国語活動・英語科
中学校	既習内容や体験から自らの考えを持ち、それを工夫して表現しようとする態度	既習内容を生かして、自分の考えを書こうとする態度	英語でコミュニケーションを図る必要性を知り、自分の意見や考えを英語で積極的に伝えようとする態度
	目的や意図に応じた確に考えを伝え合い、自分や集団の考えを発展させようとする態度	数学的な考えで、問題を解決しようとする態度	聞いたり読んだりしたことを活用して、話したり書いたりして発信しようとする態度
	単元の課題を常に意識し、周りや協働して課題に迫り、解決したことを他の学びにも生かそうとする態度	多様な考えを認めたり改善したりしながら、よりよい考えを見つけようとする態度	

※小学校における実践単元（※10月：各小学校において研究授業・討議を実施）

- 2年 算数科「かけざん(1)」
- 5・6年 外国語活動「Lesson6 What Do you want?」
- 3年 国語科「れいをあげてせつめいしよう」

※中学校における実践単元（※11月：角鹿中学校において研究授業・討議を実施）

- 1年 英語科「Daily Scene5 道案内」
- 2年 国語科「徒然草」
- 2年 数学科「図形の調べ方」

授業研究会では、前述の『主体的に学習する態度(めざす態度)』に即した評価規準をもとに、参加した教師が担当する学習グループの児童生徒を観察した。その後、授業者の発問や教具等授業者の「どの手立てが児童生徒のどんな態度」を引き出すのに有効であったか、授業者が座席表を用いて児童生徒の変容を見取ることができたか等についての検討を行った。

③円滑な小中学校の接続に向けての指導支援体制の確立

ア『戸惑いを減らすための環境づくり』(指導支援グループ)

- ・毎月、小中合同「指導支援」会議を実施し、各小中学校のきまりについて共通理解を図るとともに、地区内の小中学校での「SNSの使用実態」を把握した。
- ・小中学校の教育相談担当及びスクールカウンセラーは、個別支援を要する児童生徒の支援方法、関係機関との連携、中学校へのスムーズな移行ができるシステムづくりを行った。

イ『特色ある異学年交流活動』(学校運営グループ)

- ・小学校6年生を対象とした小中連携授業(中学校教員がT1, 小学校教員がT2)や敦賀市教育委員会が策定した「小中一貫カリキュラム」を活用し授業実践を推進した。
- ・小学生の中学校の合唱コンクールへの参加や部活動見学など中学校生活や行事を介しての交流に力を入れ、「めざす生徒像」につなげるための円滑な接続に取り組んだ。また、中学1年生が、「清掃指導」に小学校に出向いたり、「中学校生活」について小学6年生と語る座談会を開いたり、児童生徒同士の交流へと深めてきた。

3 研究の結果と今後の取組

(1) 研究の結果

① 小中学校の9ヶ年を貫く『めざす生徒像』の設定と組織づくり

- ・『めざす生徒像』の設定により、中学校生活や中学校卒業時の児童生徒の姿をイメージした先を見通した取組が各グループで見られるようになってきた。
- ・小中合同会議の開催により、教師間で小中学校間の差違を明確にさせ、相互理解を図ることで、小中一貫に向けた教科指導、支援体制の在り方に対する深まりが見られた。

② 『主体的に学習する態度』の評価規準の作成(研究開発グループ)

- ・小中合同授業研究の事前、事後の中学生対象の意識調査では、「既習内容を生かして、自分の考えを書こうとした」、「自分の考えと他者とを比べ、よりよい答えを見つけようとした」での肯定的回答がともに20%以上高まった。これは、教師の『主体的に学習する態度(めざす態度)』を意識した授業実践の表れであると考えられる。

③ 円滑な小中学校の接続に向けての指導支援体制の確立(指導支援グループ・学校運営グループ)

- ・小学校6年生対象のアンケートでは「小学校での学習を中学校で役立てたい」、「中学校生活への不安が少なくなった」の問いに対する肯定的な回答は88%、53%と過半数を越えた。また、小中連携授業の自由記述でも「交流することでいつも以上に頑張ろうと思えた。」「いつもなら無理なことも協力して解決できた。」等の意見もあり、一定の成果が見られた。

【課題】

- 『主体的に学習する態度(めざす態度)』を引き出すための手立てや見取り(評価)に捕らわれすぎたため、他の資質・能力や教科内容の習得がおざなりになった部分が見られた。そこで、教科内容の習得を意識するとともに、他の資質・能力ともつながる取組により『主体的に学習する態度(めざす態度)』を高めることが必要である。
- 『主体的に学習する態度(めざす態度)』の見取りでは、「児童生徒の活動」を引き出し、見取るのみに留まった。そこで、「変容」を見取り、“学ぶ”意欲へとつなげることが必要である。
- 指導支援、学校運営の取組においては、『児童生徒のめざす姿』をねらうまでには至らなかった。そこで、研究開発の取組を支えるための他の2グループの方向性を揃えることが必要である。

(2) 今後の取組

- 『児童生徒の変容』を見取りにつなげる『主体的に学習する態度(めざす態度)』の見直し
- 『授業の振り返り』による児童生徒自身の対話を生かした授業スタイルの構築
- 次期指導要領における『資質・能力の3要素』をつなげ、高めるための授業形態の共有化
- 本地区4校における“弱み”となる『教科内容を系統立てた指導計画』の作成
- 児童生徒が『めざす生徒像』に近づくための『教科指導を軸とする組織、取組』の見直し